

# 保育マップ型記録の前段階としての経過記録の対象

吉田直哉<sup>1)</sup> 安部高太郎<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> 大阪公立大学

<sup>2)</sup> 郡山女子大学短期大学部

## Objects of Play Process Records in Kawabe Takako's Method

Yoshida Naoya<sup>1)</sup> Kotaro Abe<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> Osaka Metropolitan University

<sup>2)</sup> Koriyama Women's College

**抄録：**河邊貴子は、保育マップ型記録の提唱者として知られるが、子どもたちの遊びが持続する以前の状況で使用可能な記録様式として「経過記録」を提案している。河邊が提案した複数の経過記録のうち、本稿では、遊びを構成するメンバーの変化に着目することで、遊びの経時的変化を捉えようとする様式（経過記録①）、遊びの合流・分流に着目する様式（経過記録②）の二つに着目する。経過記録①には、遊びの凝集性が弱い段階で、メンバーの入れ替わりによる遊びの変化が記録される。経過記録②には、個々の遊びが合流・分流する画期をなした、鍵となる子どもの動きと、それによる遊びの展開が記される。これらとは異なり、保育マップ型記録は、経過記録が捉える遊びの経時的変化が生じた理由を、遊び相互の影響から捉えようとするものである。

**キーワード：**ごっこ遊び（演劇的遊び）、遊びの生態学的配置、河邊貴子、環境図記録、日案

### 1. 問題の所在・検討の対象

現在までの日本の保育学においては、様々な保育記録の様式が提示されてきた。保育のプロセスの質の向上が強調される中で、それに資する評価の手段としての保育記録の重要性が強調されている。保育記録の多様な様式が提示されているということは、保育記録が対象とする保育のプロセスの質が多面的であるということを示唆しているはずである。ただ、保育のプロセスの質の評価点に関する議論が低調であることと、複数ある保育記録様式のうち、いずれを選ぶことが望ましいかに関する保育者の当惑との間には、関連があるように思われる。保育者がそれぞれの記録様式の特徴を把握し、自分で記録様式を選ぶ判断基準が明示されているとは言いがたい

からである。保育記録様式のいずれを選ぶかという選択を保育者に強いること自体が、保育者にとっての負担感を増大させている懸念すらある。

保育記録の重要性の強調とは裏腹に、保育記録を書くことに対する保育者の負担感、あるいは心理的抵抗は強い。仮に、公的に保育記録の様式を統一したとしても、保育者が保育を記録することの負担感は減じない。例えば、中川・塩路（2021）は「様な様式に記述することを求めるような状況が義務感を生み出し、書く意味を見出せず、負担感を作り出していると考えられる」と述べ、保育記録の様式を記述量が少ない簡易な様式に統一したからといって、保育者にとっての保育記録を書く負担は減らず、むしろ定められた様式に記述することの義務

感が生じ、それが保育者の負担感を高めている可能性を指摘している。

保育者が、なぜ保育記録を書くことに抵抗や徒勞を感じるかといえば、記録を書くことが、自らの保育の展開に有機的に関連し、その質の向上に資するものとなっているという実感が得られていないからではないか。保育者にとっての記録の作成が、〈保育の計画→実践→評価〉という、保育実践の一連のシークエンスの中に位置づかない、いわば「ノンコンタクトタイム」において、非自発的に課せられた雑務の一つとして観念されている実情があるのではないか。そうだとするならば、記録を書くことの抵抗感、負担感を軽減しようと試みるとき、記録の対象設定（ねらい）についての議論をおざなりにしたまま、短絡的に記録様式の簡易化や統一化（フォーマット化）を図るのではなくて、保育記録を書くことが、実践のシークエンスの中に確固たる位置づけと意義を有しているということを保育者自身が認識できるための方策を検討することが必要となってくる。保育者が、保育記録の目的をおさえ、記録様式の特性を捉えることで、保育者自身の実践の一環として、記録行為への意味付与を支援する必要がある。

現在、多くの保育記録は子ども個人に着目した様式を提案している。しかしながら、保育実践は、それが複数の子どもの共同生活を前提とする集団的営為である以上、保育記録は個人記録に回収され尽くすことはありえない。つまり、保育実践が、複数の子どもを対象とする集団的な関与を必須とする以上、それを記録しようとすれば、子どもの個人記録の集積から保育記録が構成されるということはあるはずである。

子ども個人の最善の利益を追求することと、集団の育ちを保障することという、現在の保育理念の二義性に応じつつ、保育実践の実際的特性に応じながら、かつ、保育者自身にとって、実践のシークエンスの一環として組み込まれていることを実感しうるような保育記録様式の模索を続けているのが、本稿において着目する幼児教育学者の河邊貴子である。河邊は、子どもの個の育ちと集団の育ちの弁証法的な実現が、遊びにおいてこそ達成されると考えている（安部・吉田 2024）。それゆえ、河邊においては

保育実践の目標は、子どもの遊びの発展に置かれる。遊びの発展に資するような記録様式の開発を試みる河邊は、その試行錯誤の中で、多様な記録様式を提示し、それらを、子どもの遊びの実際に即して使い分けることを提案してきた。

河邊は、東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程（幼児教育学）修了後、12年間の東京都公立幼稚園勤務を経て、1993年から97年まで都立教育研究所幼児教育研究部にて指導主事を務めている。1999年、立教女学院短期大学助教授に着任、2006年には聖心女子大学文学部教育学科に異動し、保育者養成に従事してきた。2024年現在、同大学教授である。彼女が、保育者であることを中断し、保育研究者・保育者養成者としてのキャリアを歩むなかでも、保育記録様式の開発は一貫して彼女の核心的な関心であり続けてきている。すなわち、保育記録論は彼女のライフワークである。

河邊の記録様式開発の試みは、彼女自身の保育者としての実践経験の中にその出発点がある。彼女は、幼稚園教諭としてのキャリアのなかで、自らが書き記すための保育記録様式を創案してきたのである。

河邊は、一般には「保育マップ型記録」の発案者として知られていよう。保育マップ型記録とは、保育室等での子どもの遊びを空間俯瞰的にマッピングすることで、遊び相互の影響を捉えようとするものである。ただ、保育マップ型記録は、彼女自身が述べているように（河邊 2020：81）、子どもの遊びが持続している状況でなければ使うことはできず、使用可能な場面が限定されている。つまり、普遍的に使用可能な保育記録様式なのではない。もし、そのようなのであれば、保育マップ型記録が未だ書けないような状況、すなわち、遊びが安定的に持続していない段階においては、別の保育記録様式が使用されることになろう。しかし、河邊が、保育記録様式として、保育マップ型記録以外の記録を提案しており、複数の保育記録様式を適切に、かつ自在に使い分けることのできる技量を保育者に求めてきたことについては、現在に至るまでほとんど言及されることがないままである。

河邊にとって、保育記録の作成は、子どもの育ちに資するという目的のほか、保育者が子どもを捉

えるまなざしが磨かれていくという目的も有する(河邊 2021b: 22)。それゆえ、河邊が求める複数の保育記録様式の活用方法への習熟と、記録様式の使い分けを判断する基準の獲得、および、その基準に基づく遊びの状況に対する評価能力のいずれもが、保育者の専門職的熟達にとって重要なポイントとなると考えられているのである。

本稿では、河邊において、保育マップ型記録の前身として彼女が提案した複数の「経過記録」の様式上の特性に着目し、保育マップ型記録との異同を確かめることによって、河邊が遊びの展開を、どのような出来事を画期と捉えて見てとろうとしているのかを明らかにしていきたい。本稿において取り上げる「経過記録」は、遊びが持続する前の段階において遊びの変化を、時間の流れに即して捉える保育記録であるという共通性をもつ。

河邊の保育記録論、特に保育マップ型記録については、先行研究において、保育室等の保育環境を記録するものだと捉えられてきた(瀧川 2011, 高辻 2016)。ただ、河邊は、かつて自らが提唱していた「保育環境図記録」を、現在彼女が提案している「保育マップ型記録」へとアレンジし、自らの記録様式の呼称を変更した際、その理由を、「保育マップ型記録」が、環境図記録とは異なって、遊ぶ子どもの姿だけではなく、保育者の願いをも記す点に重点を置きたかったからだとして述べている(河邊 2008: 119)。河邊は、保育環境を鳥瞰しつつも、環境と子どもたちの相互作用としての遊びの所在を「マッピング」しようと試みている。つまり、河邊にとって、環境はあくまでも遊びを構成する要素の一つに過ぎないのであり、環境の位置を網羅的に記録したとしても、遊びの鳥瞰的記録にはならない(河邊 2008: 111)。この点を踏まえれば、先行研究が、保育マップ型記録を、単に保育環境を書くための記録だと捉えているのは、一面的な理解というほかはない。例えば、瀧川光治は、河邊が保育環境図記録と呼んでいたものを保育マップ型記録と名称変更したことを記しているが、その含意については説明しておらず、河邊以外の環境構成図記録と同様に、保育室内の環境構成と子どもの位置を記すものとして保育マップ型記録を捉えている(瀧川 2011: 61f.)。つまり、瀧川は、河邊の保育環境図記録を、保育室内

の人的環境と物的環境を図示するものだと認識しているのである。しかし、河邊が、保育マップ型記録のメリットを、遊びを空間的に捉えられることだとしているように(河邊 2020: 77)、保育マップ型記録の対象はあくまでも遊びであり、物的環境や人的環境は、遊びの構成要素となっている限りにおいて記録される。つまり、河邊は、環境図の中に遊びをマッピングしようとしたのが保育マップ型記録ののだが、瀧川においては、それは物的・人的環境を平面上に図示するものであると誤って認識されてしまっているのである。

ここで、河邊自身が例示する保育マップ型記録の実例を見てみよう。次頁の図1は、河邊が自著で取り上げている、保育マップ型記録の一例である。

記録用紙の中央には「環境図」が配されているが、そこに記されているのは「誰と誰が何をしているか」(河邊 2020: 77)であって、本記録では、そもそも物的環境、人的環境の配置を、サイズ感も含めて、忠実に再現しようと試みているようには思われない。ここに記されているのは、遊びが、どこで、何をめぐって、誰が中心となって展開されていたかという「空間的配置」である。

注目しておきたいことは、図1においては、物的環境の一部がピックアップされて略記されていることである。選択的に記録されている物的環境は、遊びの中核的な構成要素と見なされるものである。言い方を変えれば、子どもたちの遊びを支える見立てを共有しやすくしている〈舞台装置〉、あるいは大道具・小道具と言えりような、遊びを展開させていく上での場面設定を可視的に支えるモノである。例えば、図1に関して言えば、中央右上に「ディズニーランド」に見立てられた大型積み木で作られた舞台装置が記されているが、この大型積み木があることで「ディズニーランド」における遊具、アトラクションの見立てが、子どもたちに共有されやすくなっているのである。

保育マップ型記録は、既に述べた通り、「誰と誰が何をしているか」(河邊 2020: 77)、つまり、保育者にとって持続している遊びとして捉えられた遊びの場をマッピングしている。

保育マップ型記録が捉える遊びは、他者からの視線の存在を前提とするごっこ遊び(演技的活動)を



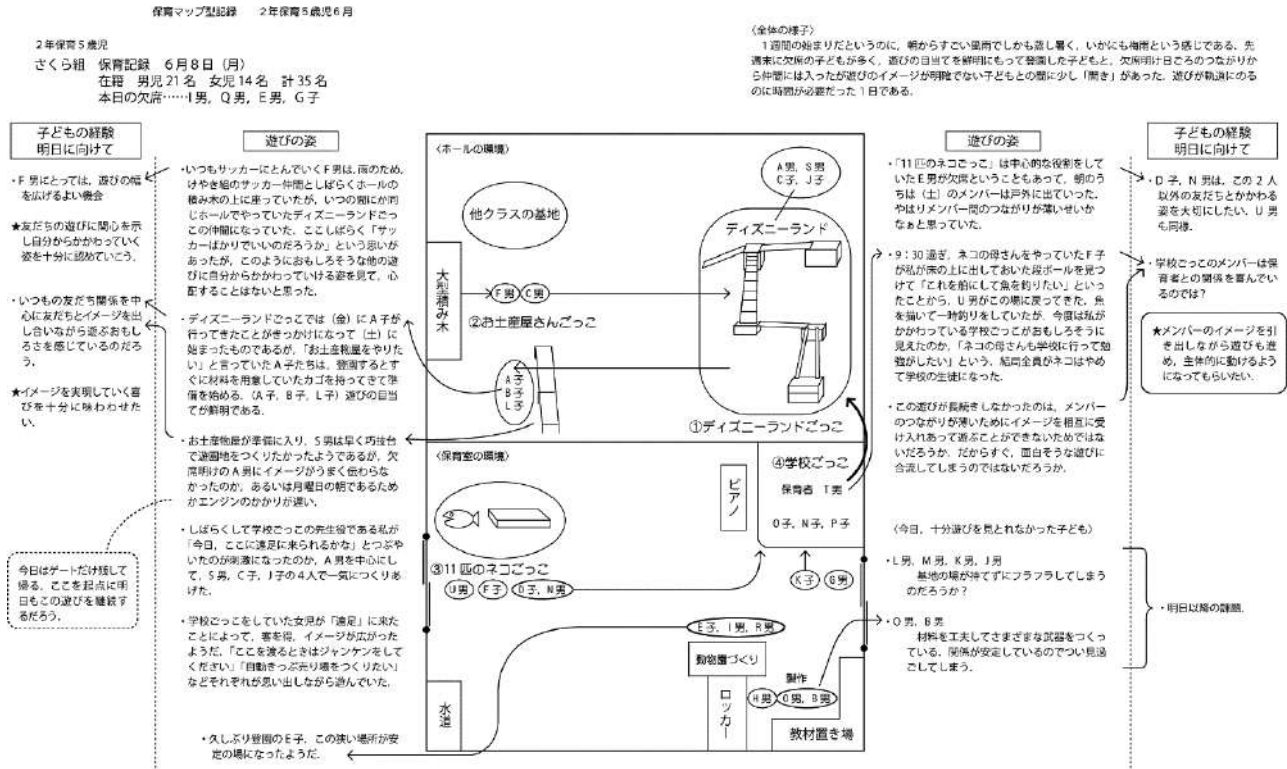


図1 保育マップ型記録の例(河邊(2020:86f.)を基に作成)

モデルにしており、子どもが、モノや空間を見立てる行為を通して、他の子どもと遊びのイメージを共有することで展開していく、持続性のある遊びである(河邊 2020:27f.)。河邊によれば、保育マップ型記録の対象となる遊びは、同じメンバーで数日間は持続するものであり、子どもの年齢が低い場合など遊びが安定していない時には保育マップ型記録が適用できない(河邊 2020:77f.)。

ただし、既に述べたが、河邊は、遊びが安定していない段階における記録様式は、独自のものを複数提案している。河邊は、記録様式によって保育者が何を残すかということが規定され、保育実践において何を見るかという見方が限定されることを指摘し、「記録の目的をしっかりとち、子どもの姿に合わせて柔軟に[記録]様式を使い分けることが望ましい」と述べる(河邊 2020:73)。本稿で着目し、その特色を明らかにする経過記録は、遊びが持続する前の段階で、時間の変化に即して子どもの遊びを捉える記録様式である。

## 2. 経過記録①：遊び集団を構成するメンバーの変化を捉える記録

河邊は、経過記録の「様式の原理は保育マップ型

記録と変わらない」と述べている(河邊 2020:81)。様式の原理が変わらないというのは、子どもの遊びを捉え、遊びが相互に影響を与え合っていることを示そうとする点で、経過記録と保育マップ型記録が共通しているということである。経過記録と保育マップ型記録は、子どもの遊びを捉えようとする目的を共有しているが、経過記録は、子どもの遊びが持続し安定化していく前の段階で、遊びを構成するメンバーの変化や、そのメンバーの動向を書くことで、遊びの経時的変化を捉えようとする記録である。例えば、河邊が提案する経過記録の様式としては、次頁の図2のようなものがある(以下、経過記録①と呼称する)。

この経過記録①は、1日のなかで遊び集団(子どもたちによって自生的につくられる遊びのインフォーマルなグループ)のメンバーに着目して、遊びが経時的に変化していく要因を、遊び集団のメンバーの入れ替わりに見るものである。つまり、遊びを、それを構成するメンバーの凝集性から見てとろうとしている記録である。ただ、この段階においては、遊び集団の凝集性は比較的弱く、遊びのメンバーは頻繁に入れ替わる。そして、そのメンバーシップの変化に伴って、遊びそのものが重大な

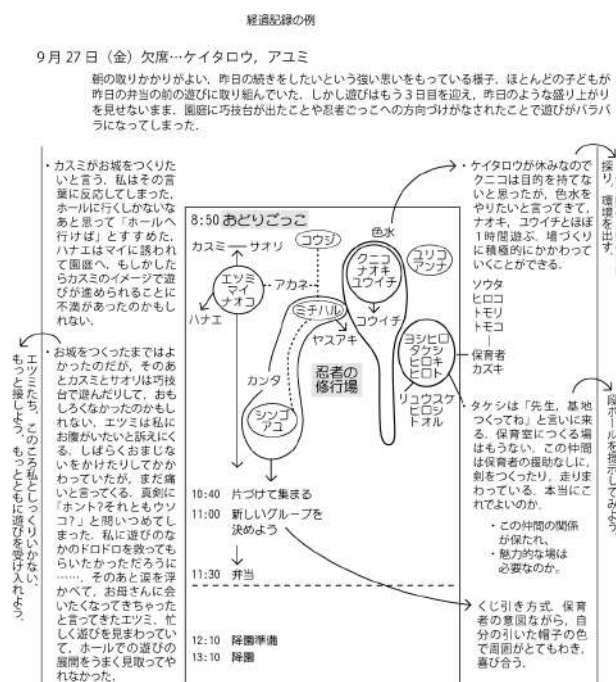


図2 遊びの経過記録①（河邊（2020：82）を基に作成）

変容を遂げていく。

この段階において、遊びの経時的変化を捉えようとすれば、その変化の契機となったメンバーの入れ替わりを捉えなければならない。このような、メンバーシップの変化に焦点を当てて経過記録①が書かれるのは、子どものなかで誰と誰が遊び集団をつくる仲間関係にあるのか、どのようなときに遊びが合流あるいは分流しやすいのかが見えてくるからである（河邊 2020：81）。ただ、この経過記録①の様式では、遊びの構成メンバーの変化を記録する一方で、なぜそのメンバーが遊び集団から離脱したのか、あるいは別の遊び集団へ参入した理由は何かについては記されない。遊び集団間のメンバーの出入りは、今遊んでいる集団とは別の集団から、何らかの感覚を得ていたからだと考えられるが、そのメンバーが遊び集団を変えた契機としての、遊び集団の間の相互の影響は、経過記録①の様式では見えにくいままである。

以上を踏まえて、遊び集団のメンバーの変化に着目するのではなく、メンバーの変化により、個々の遊びに生じた変化をチャート的に捉えようとした記録が、次の図3である（以下、経過記録②と呼称する）。

### 3. 経過記録②：遊びの転換を画したメンバーの動向を捉える記録

経過記録②では、一つ一つの遊びに着目して、遊び同士の影響を捉え、遊び同士が合流したり分流したりする経時的变化を「遊びの流れ」として示している。経過記録②においては、個々の遊びの流れの変化を画した、重要な子どもの動きが記されている（図3を参照）。

例えば、ホールでなされていた「戦いごっこ」が、S男の参加及び提案によって「お化けのお面づくり」をすることになり、最終的に「お化け屋敷」の遊び集団に合流していったことが示されている。図3の右側の「男児4名互いに乗り合う」段ボールの車づくりの遊びは、できあがった車を保育室から園庭に出して遊ぶように変化している。この車遊びへとY男を誘いに保育室へ行ったところ、最終的に「お化け屋敷」に合流したことが示される。「1日の遊びの流れの記録」においては、遊び集団のメンバーのうち、遊びの分岐のきっかけとなったメンバーの遊びからの離脱という転換点を捉えている。上記の「戦いごっこ」においてはS男が転換点を画したことが記されており、「車づくり」から園庭での車遊びをしていた男児4名から誘われたY男が転換点になっている。ただ、経過記録②のような「1日の遊びの流れの記録」を見ても、遊びの転換点となったメンバーの子どもが、なぜそのような行動を取ったのか、そもそもなぜその子が転換点をつくるキーパーソンとなりえたのかは明らかにはならな

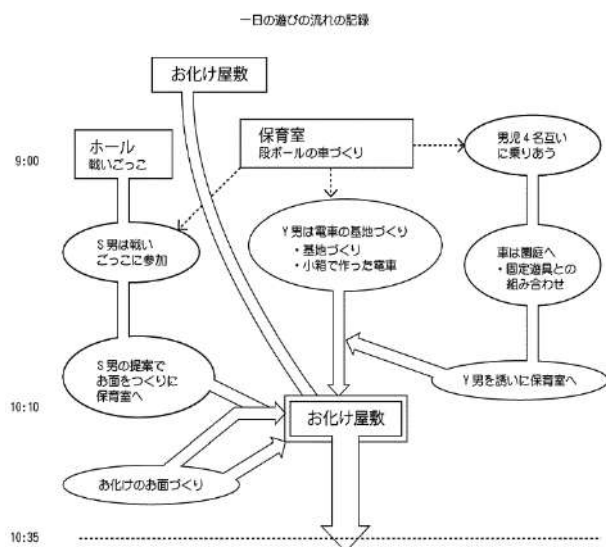


図3 遊びの経過記録②（河邊（2020：83）を基に作成）



い。ここには、遊びの間の相互の影響がなぜ生じたのかを説明する手掛かりがないからである。遊びの流れの変化を生じさせた契機を明らかにするのであれば、その変化の前段階において、その変化のキーパーソンとなる子どもが、何を捉え、経験していたのかを捉える必要が出てくる。

#### 4. 保育マップ型記録：遊びの影響関係を可視化する記録

河邊が、保育マップ型記録を提起したのは、以上に示したような経過記録では、遊びの経時的変化は捉えられるが、そのような経時的変化を生じさせた原因、すなわち遊び間の相互の影響を記すことができないことに不満を感じていたからであろう。遊びの変化の契機を捉えようとすれば、その変化の前段階としての、遊びの「状況」に着目しなければならない。河邊は、変化の前段階となる遊びの状況性、複数の遊びが同時進行的に行われている、生態学的な配置（棲み分け）を捉えることによって把握しようと試みる。

彼女は、保育マップ型記録の利点を「他の遊びと空間的にどのような関係にあり、どのような関係をもちながら展開するかが視覚的にとらえやすい」こ

とだと述べている（河邊 2020：84）。ここでいう空間的な関係とは、保育空間内における遊びの生態的配置（棲み分け）のことであり、その遊びがどこでなされていたかと同時に、どこではなされていなかったかも記されていることになる。

個々の遊びにおいては、その遊びを構成している子どもたちの見立ての共有を支え、他者からの視線を感じつつなされる演技的活動としての遊びを生じさせた〈舞台装置〉となっている物的環境と一緒に書き込まれている。再掲になるが、次の図1は保育マップ型記録の例である。本図における〈舞台装置〉となる物的環境とは、ディズニールンドでは複雑に組み合わされた大型積み木、お土産屋さんごっこでは横長のテーブル、11匹のネコごっこでは段ボール、学校ごっこではピアノである。

例えば、紙面中央左下の「11匹のネコごっこ」に描き込まれている四角は段ボールを示していると考えられ、この段ボールが「船」に見立てられたことで、魚釣りをするという遊びのイメージがつけられたことが右側の文章中に記されている。演技的活動としての遊びを支える舞台装置としての物的環境とは、この段ボールのように、子どもが遊ぶ場に対する見立てを鮮明にさせ、それに子どもたちが身体的

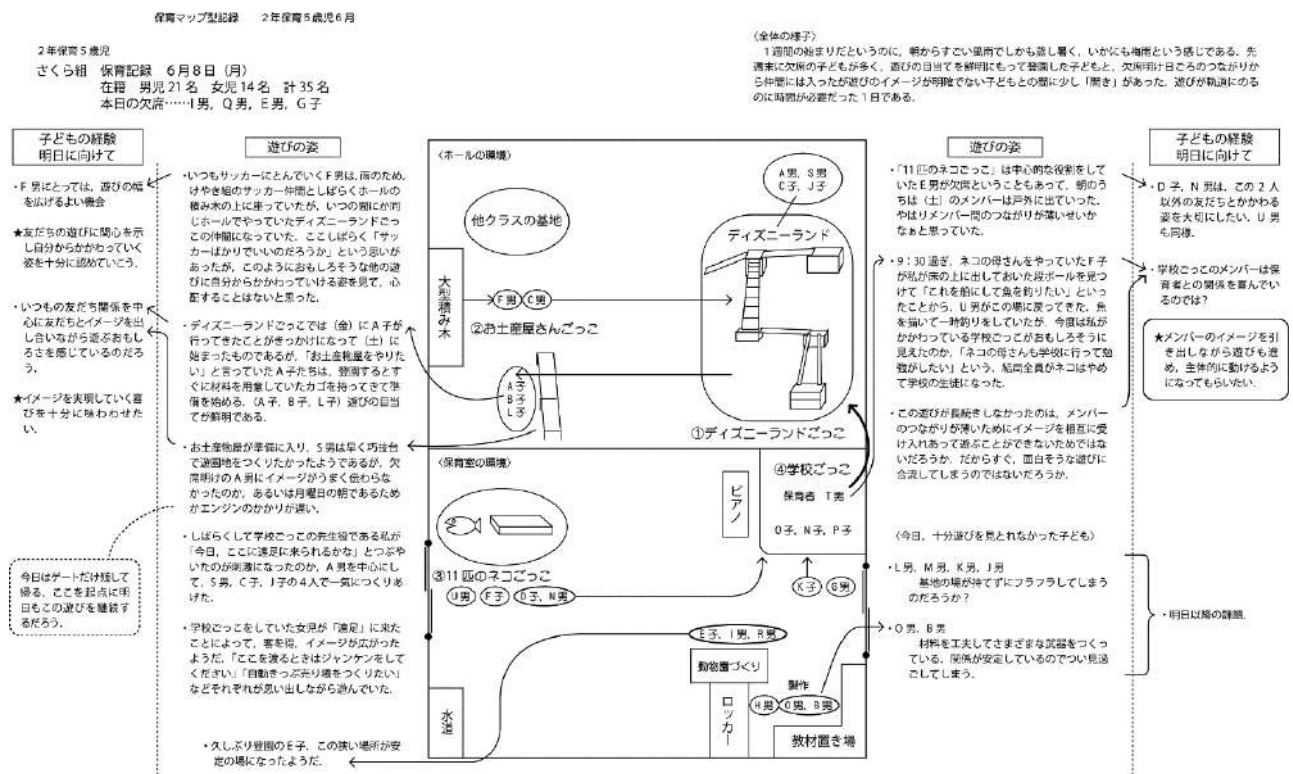


図1(再掲) 保育マップ型記録の例

に関わり合うことで、ある子どもの身体的行為の持つ意味が、他の子どもにも理解されやすくなるようなメディア（媒体）の機能を有する。

保育マップ型記録の中央に描かれるマップでは、遊びの展開された空間俯瞰的な位置のみならず、そのクラスの遊びの全体像ともいうべき、遊び相互の位置関係が見えるようになっている。それゆえ、遊びの規模や範囲、ある遊びの隣でどのような遊びが展開されていたか、その遊びが隣の遊びから何を採り入れたのか、あるいは採り入れなかったのかなどが理解しやすくなっている。保育者は、保育マップ型記録を作成し、それを見直すことで、遊びがどの場所で起こったのか、その遊びが（他の場所ではなく）そこで起こったのはなぜか、その遊びがどのように展開していったのか、その展開を引き起こした契機（子どもの動き、周囲の遊びから感受されること）は何だったのかなどについて、考察することができる。遊びの展開の契機をおさえることができれば、その契機に接続する次なる契機がどのようなものかについての予想が、保育者にとっても立てやすくなるだろう。次なる契機を触発するために、保育者が構想する自身の行動計画こそが、それが明示的に言語化されていなかったとしても、未来へ向けた次なる援助の方略として、創発されやすくなるのである。

## 5. 子どもの遊びの志向性から保育の計画を導く記録様式の探求

以上見てきたように、子どもの遊びを捉え、遊びが相互に影響を与え合っていることを示そうとするという共通点を有しつつも、経過記録と保育マップ型記録の両者は、子どもの遊びが持続する度合いに対する保育者の評価によって、使い分けがなされていると考えられる。経過記録が、遊びの変化に着眼するのに対し、保育マップ型記録は、子どもの遊びの生態学的配置を捉えることによって、子どもが遊びのどこに面白さを感じ、何を体験しているのかという子どもの遊びの「志向性」を保育者が掴み、この「志向性」の延長に、子どもにとって次に必要な経験は何かを読み取り、具体的な援助の可能性を見出すことを目的とした記録様式であるといえる（河邊 2008：116）。

河邊において、保育マップ型記録の使用に際して、遊びが持続していることが前提的な条件として与えられていた。それゆえ、彼女は、遊びが安定的に持続する前の段階、すなわち遊びの変化が急激である段階を捉える複数の記録様式を提案した。それが、本稿において検討してきた経過記録である。経過記録では、遊びの経時的な変化が生じた原因（遊び集団のメンバーの変化や、遊びに対する子どもの志向性の変化）に目を向けており、遊びが持続していくための援助の可能性を探るためのものとして提案されたものである。

河邊において、保育記録は〈明日〉の保育の構想を生むものである。それゆえ、保育記録は、日案の作成作業と大きく重なり合う。記録から計画が創発されると見なす河邊において、保育者が予め計画した保育実践の成否を計画に即して評価するために記録が書かれるべきだという発想はない。このことは、河邊が保育マップ型記録の着眼点を、SOAP という看護記録の視点と重ねていることにも表われているだろう。SOAP（Subjective data, Objective data, Assessment, Plan）とは、「主体者を理解することから次の手立てを導き出す」ためのプロセスである（河邊 2021a：20）。具体的には、①遊びの主体者である子どもの遊びの姿の把握をし（S）、②その遊びが子どもの育ちにどのような意味があるのかを保育者が見通し（O）、③子どもにとって次にどのような経験が必要かを保育者が導き出し（A）、④そのような経験が実際に充足されるような保育環境を構成する（P）、という手順をとって展開される保育者による援助的活動である。SOAP は、予め計画したことに対する評価を記録として残すという発想とは異なり、実態把握から連続的に計画を導こうとするものである。言い換えれば、実態把握が適切になされれば、計画はおのずと創発されるのであり、実態把握と計画を別個の作業として分離させる必要はない。むしろ、計画は、実態把握と一体化されていなければならない。河邊は、「保育は子ども理解のうえに保育者の願いを重ねて環境を構成することによって展開する」と捉え、この展開が連続的であるほど子どもの育ちに即した保育展開になっていくとする（河邊 2020：74f.）。河邊にとっては、実態把握としての子ども・遊びへの観察・理解、その記録、そして

それに基づいた子どもへの援助方略の創案は、いわば一連のシーケンスなのであって、それらは、子どもが紡ぎ出し、保育者が読みとる意味の連なりによって生起している以上、それらを個別のステージの組み合わせとしてイメージするのは適切ではない。

河邊においては、子どもがどう遊んでいたかという実態把握から、保育者が子どもの遊びの志向性を読み取り、それに基づいて保育者の援助の可能性が具体的に導かれる、という循環構造がある。保育マップ型記録には、この実態把握・子どもの経験の意味の読み取りから、援助の方向性が保育者に自覚され、それが実践化されるまでの意味づけが、可視的な形で示されているのである。

#### 附記

本稿は、2023年度日本子ども社会学会研究奨励基金による助成（安部高太郎・吉田直哉「現代日本における保育記録方法論と保育理念としての子ども像の関連性の解明」）を受けた研究成果である。なお、本稿の一部は、第8回日本保育者養成教育学会研究大会において「保育マップ型記録のプロトタイプとしての保育経過記録」として口頭発表されている（オンライン開催、2024年3月9日）。

#### 文献

安部高太郎・吉田直哉（2024）「保育マップ型記録が捉える遊びの構造」郡山女子大学『紀要』60  
河邊貴子（2008）「明日の保育の構想につながる記録のあり

方：「保育マップ型記録」の有用性』『保育学研究』46（2）  
河邊貴子（2013）『保育記録の機能と役割：保育構想につながる「保育マップ型記録」の提言』、聖公会出版  
河邊貴子（2014）「幼児教育指導と評価に生かす保育記録の在り方」『初等教育資料』918  
河邊貴子（2020）『遊びを中心とした保育：保育記録から読み解く「援助」と「展開」』（改訂第2版）、萌文書林  
河邊貴子（2021a）「総論 保育記録の書き方」『保育の友』（2021年4月号）、69（5）  
河邊貴子（2021b）「遊び理解を次の保育につなげる記録：「保育マップ型記録」と「SOAP」の有用性」『発達』42（167）  
近藤幸子（2002）「幼児教育における教育的で計画的な環境構成と保育記録」『佐賀大学教育実践研究』19  
高辻千恵（2016）「計画に基づく省察と評価」日本保育学会編『保育のいとなみ：子ども理解と内容・方法』（保育学講座3）、東京大学出版会  
瀧川光治（2011）「指導計画づくりに生かすための保育記録のあり方（1）：先行文献の整理を中心に」『教育総合研究叢書』4  
中川欣子・塩路晶子（2021）「就学前施設における保育記録のあり方に関する研究：A市保育者のインタビュー分析を手がかりに」『鳴門教育大学学校教育研究紀要』35  
文部科学省（2021）『指導と評価に生かす記録（令和3年10月）』チャイルド本社  
渡辺桜（2014）「集団保育において保育課題解決に有効な園内研究のあり方：従来の保育記録と保育者の「葛藤」概念の検討をとおして」『教育方法学研究』39

受付日：2024年3月28日